

第9回 絶対に教科書に載らない歴史

これまでライブドアについて説明してきました。今回はもう一方のフジサンケイグループについても触れてみることにします。

フジサンケイグループの歴史は大元である「産経新聞」からスタートします。1922年に大阪で前田久吉氏が発刊した新聞「日本工業新聞」。これが産経新聞の始まりだったのです。しかしこの日本工業新聞は1942年の新聞統廃合令により廃刊します。そして1950年には東京版が先に復刊されます。このとき発刊されたのが「産業経済新聞」です。後に本家である日本工業新聞も復刊しますが、1959年には現在の「産経新聞」に統一されます。

それから少しさかのぼった1958年のこと、産経新聞を発刊する産業経済新聞社は、東京進出による多額の借入金がかさみ、一時は経営危機に陥ります。窮地に立たされた前田氏は財界に援助を求めます。そして文化放送社長の水野成夫氏の尽力があって同社は多額の資金援助を受けます。その後水野氏が社長に、中日新聞の予良工（よら・あいち）氏が副社長に就任し、前田氏は会長となり一線から身を退きます。また取締役には東京急行電鉄（東急）社長の五島昇氏、信越化学工業社長の小坂徳三郎氏がいて、監査役として後に産経の社長となった鹿内信隆（ニッポン放送専務、翌年産経副社長に就任）がいました。

鹿内氏はニッポン放送株取得を行い、実権を握ります。1957年には文化放送と共にフジテレビを設立し、1967年にはフジテレビ、文化放送と共にフジサンケイグループを形成します。そして翌68年から水野氏に代わって鹿内氏が社長に就任します。そして1974年にはグループの会長に就任、ここから鹿内一族による支配が始まります。1985年には息子の春雄氏が会長に就任しましたが、88年にわずか42歳で急逝します。その春雄氏の後を継いだのが信隆氏の娘婿である鹿内宏明氏です。春雄氏はソコソコいい経営を行っていたようですが、宏明氏はグループを私物化していたようで、社内外から批判を浴びます。そして1992年、クーデターが起きて宏明氏はグループのすべての役職を解かれます。背後には財界の意向があったとも言われていますが、真偽は不明です。それにより産経新聞社社長には羽佐間重彰（現グループ会長）氏、フジテレビ社長には日枝久氏（現同社会長）が就任します。

宏明氏はグループから追放されたものの、依然として同氏の影響力は株式支配（51%）という形で残されていました。これを脅威に感じた日枝氏らは、宏明氏の影響力を排除するためにニッポン放送とフジテレビを上場させ、第三者割当増資を行ないました。これにより宏明氏の持ち株比率は下がり、日枝氏の思惑は成功したのです。そして2005年には保有する全株式は大和証券SMB Cに売却され、宏明氏の影響力は完全に排除されたのです。

こうして日枝氏らは、株式市場を巧みに利用することで邪魔者を排除することに成功しました。しかし、彼らと同じ株式市場を用いて、自分たちに危機をもたらす人物がいようとは、この時誰が考えていたのでしょうか...